



## 『共に育ちあう保育実践』 子ども理解から仲間づくりへ

### ～あそびから学ぶということ～

豊中市立認定こども園 園長 やすだ 保田 いくこ 維久子さん



人権保育専門講座3では、保田維久子さん（豊中市立認定こども園）をお招きし、「乳児のあそび」「ごっこあそびの発展」を中心に、乳児保育の実践についてお話しいただきました。松阪・名張・桑名の3会場でおこない、合計157人の方々に参加いただきました。

「ごっこあそび」を、流れのなかで発展していくものとしてとらえ、見通しをもって取り組むことにより、子どもたちをつなぐことができるということを学ぶことができました。

### 「豆の嫌いな園長先生」～日常の中に人権を～

人権保育って何でしょう。子どもの命を守ることが、子どもの人権を守ることです。私たち保育にかかわる者は、まさに子どもたちの命を守るところにいるのですから、「保育＝人権保育」と言ってもいいのではないかと考えています。私は「ちゃいんどネット大阪」の機関紙に「豆の嫌いな園長先生と楽しい人権保育」という記事を書いています。日常のなかにあることから人権保育を大事にしていきましょう、という内容のものです。

園の子どもたちはみんな、私が「豆が嫌い」ということを知っています。私がそのように話をしているからです。なぜそのような話をしているのかというと、「園長先生でも苦手なことがあるよ」「何でも食べる、何でもできるスーパーマンじゃないよ」ということを伝えたいからです。子どもたちに「できるからいい、できないからだめ」ではなく、「だれでも苦手なことはある」と理解してほしいと思っています。日々の生活のなかに入権力につながるものを入れていきたいのです。

### 子どもたちが「やりたいことに挑戦できる」ように

人権保育をしていこうとするときには、「このことを大事していこう」というこだわりが大切だと思います。私の母は今年90歳、元気です。昭和4年生まれの、まさに若い頃戦時中を生きてきた人です。赤ちゃんの時に母親を亡くしていて、親戚の家を転々としながら育ってきました。なので、例えば「お皿を洗う」とことひとつとっても「他の家では違うやり方かもしれない」と気を遣ってしまうような人でした。その母のもとで育った私は、『『違う』と笑われるかもしれない』『何に対しても自信がない』』と思い、いろんなことを率先してできないところがありました。「周りを見て合わせる」ということに長けている子どもでした。

保育士になった最初の頃は、周りからどう見られているかを気にして、おもしろくない保育をしていましたが、同和保育と出会うなかで、私のことを私そのもので認めてくれる周りがあるとこんなにも違うのかと感じたことがありました。一色艶子先生との出会いからです。

一色先生は、いつも「自分のやり方でやり」と言われていました。私は「そんなことできない」「どうしよう」と思っていました。とにかくやってみるなかで、だめだったら「あかん」と言われるし、よかったらほめられ、認めてもらえました。私のことを否定されることがなく、「やっていいんだ」ということを実感しました。「やりたい」という思いをあきらめてきた私でしたが、保育士になってから「できるかもしれない」「やってみよう」と思えるようになってきました。

目の前の子どもたちが「やってみたいこと」をあきらめるようになってほしくないと思っています。「希望がもてる」「やりたいことに挑戦できる」ということを、人権保育のなかで育てていきたいということが私のこだわりであり、人権保育を大事にしていきたいという思いのきっかけでもあります。

## アイスブレイク

「かえるのうたが…」をうたいながら、両隣の人の肩や背中を交代でこすります。それをだんだん速くしていきます。懇談会などで円になっておこなうと、成功したらうれしいし、失敗しても顔を見合わせて笑い合えます。一体感が出て、なごやかに話ができるようになります。子どもたちとするときには、前後ですると面白いです。「もしもしかめよ…」など、他の歌でもOKです。



## ピッピーとチッチ

白い方がピッピーちゃん 赤い方がチッチちゃんです。

♪二羽の小鳥 かわいい小鳥  
♪飛んでけチッチ 飛んでけピッピー  
「呼んでくれるかな？」  
「ピッピーー！チッチー！」  
♪お帰りピッピー。お帰りチッチ。

歌に合わせて、中指と人差し指を入れかえて、ピッピーとチッチが飛んで行ったり帰ってきたり…

不思議で楽しい！



## 生活や遊びの中で考えていく

一緒にあそべない子、部屋にいない子、かんだり引っかいたりという思いの出し方をしてしまう子、友だちのおもちゃをとったり、こわしにいたり…。様々な姿を見せる子どもたちに、どうかかわっていったらいいのでしょうか。保護者とはどうかかわっていったらいいのでしょうか。そんな悩みをどう解決していくのか。「楽しいあそび、いろんなあそびををいっぱいしたらいい」という人がいます。「取り出して1対1の関係づくりを大切に」という人もいます。それらを否定するつもりはありません。でもそれだけをやっていても、現状は変わりません。改定された保育指針、幼稚園教育要領のなかには、「生活、あそびのなかで変えていきましょう」と書かれています。

生活についてめざしていくことは、「生活習慣が自立していること」というふうにはとらえていません。社会に適応できる力を身につけることだと思っています。それがあれば、家庭のなかでの生活から保育所という社会に出てきて、生活することができます。

私は、普段の園生活のなかでは「時間を決めてトイレに行かせる」ということをしていませんでした。あるとき、失敗してしまった女の子から「保田先生がトイレに行けっていわないからだよ」と怒られてしまいました。その子はそう言えるだけ力を持っていると言えますが、私たちは、日々の園生活の中で、子どもたちにどういう力をつけていくのかを考えていかないといけません。



## 乳児は「やってもらう」だけの存在？

改定された保育指針は、3歳未満の保育について充実した書きぶりになっています。海外の研究においても、乳児保育の大切さが言われるようになってきています。でも日本では「乳児保育は家庭の補完」という見方が大半を占めているように思います。「3歳児神話」と言われるように「3歳までは母親と一緒に過ごさないといけない」「だからそれまでは集団生活をする必要がない」などと考えられたりしています。では、保育所にいる0歳児のことを考えてみましょう。保育所では、0歳児が集団の中で生活しています。まったく周りや友だちと関係なく遊んでいるのでしょうか。

私には、0歳児の前で必ずするあそびがあります。頭に物を乗せて、頭や体をかたむけて頭から落とし、「あ、落ちた」と言います。子どもたちは、5回目ぐらいから笑うようになります。同じあそびを、歌をつけ、リズムに合わせてする先生もいます。「♪先生の頭にちょんちょりんが乗ってる♪ヨイヤサッサー」と歌って頭の上の物を落とします。子どもたちをよく見ていると、リズムをとっている子、おもしろくてげらげら笑っている子、笑っている子の顔を見て笑う子、いろいろな様子を見せています。そういう姿が0歳でもあります。

乳児は「やってもらうだけ」の存在というのが、世間の見方になっているように思いますが、実はそうではないのです。

## あそびのなかでの保育者のかかわりを見直す

「ご飯を炊く」取組を5歳の子どもたちとしました。おかずは家からもってきてもらい、園にある仕切り皿に盛り付けました。小さい仕切りに卵やサラダ、大きい仕切りにはソーセージや唐揚げ等を入れてきれいに盛り付けられる子がいる一方で、お弁当箱をがさっと逆さまにしてそのままポンと入れる子、おかずを積みあげていく子もいました。

親に「経験させてやってよ」というのは簡単です。でも、園生活のなかで、子どもが食べ物のおもちやを皿にもりつけて「先生、はい」とやってきたときに、どんなかかわりをしてたのかということを見直してみましよう、と話しました。

園にあるおもちゃで、ケーキ、お寿司、ソーセージを一緒に入れてくる子、ブロックを入れて持ってくる子。子どもたちがどんなイメージで、どのように入れてもってきているかということ、しっかり見て対応しているかということ、を反省しなければならぬと思いました。

1歳児が「先生これ」と持ってきたときに食べるまねをして「辛っ〜！」と言うと、今度は「先生、これ辛いよ」と言ってもってくる。またそれを食べて「辛いー！」という。そんなやりとりをたくさんしますよね。このあそびは食べるまねをする先生の様子や表情がおもしろいのですが、なかには先生の表情などをまったく見ていない子もいます。本当にやりとりができているか、そのあそびの面白さが伝わっているかどうかということを見ていかないとはいけません。



## ◆ 3つのあそび ◆

### ○活動的なあそび・・・体を使ったあそび・道具を使ったあそび

たわむれ遊び・指でツンツン  
一本橋コチョココチョ・いないいないばあー  
ごつつんこ・お船はぎっちらこ  
ハイハイ・歩く・走る・まてまて・かくれてはばあー  
箱押し・ボール遊び・コンビカー・すべり台

### ○ごっこあそび・・・みたて・つもりあそび

「ちょうだい」「ありがとう」「まんまどうぞ」  
「おいしい」「いってきまーす」「ただいま」  
のやりとりあそび（表情・しぐさ・ことば）  
どうぶつ・のりものごっこ  
（犬・猫など身近な動物 電車・車・バスなど）  
生活再現遊び  
（まんまごっこ・おかあさんごっこ・病院ごっこ…）

### ○探究・構成あそび・・・感触、音、動きの変化などを楽しむあそび

物を使うこと、作る楽しさを知るあそび  
水・砂・泥んこなどの感触遊び  
道具を使う（ふみ台にのぼる・スプーンですくうなど）  
紙を破る、石を落とすなど動きの変化や音を楽しむ  
プリン型、積み木など、壊したり作ったりする  
ブロックなどでいろいろなものを作る  
シール、マグネット

私たちは「3つのあそび」ということを提案しています。遊びを3つに分けて、展開などを考えていったらどうかというものです。

子どもたちにはそれぞれの面白さを体験してもらいたいと思うので、3つのあそびに分け、どれも子どもたちが体験できるようにしていきます。

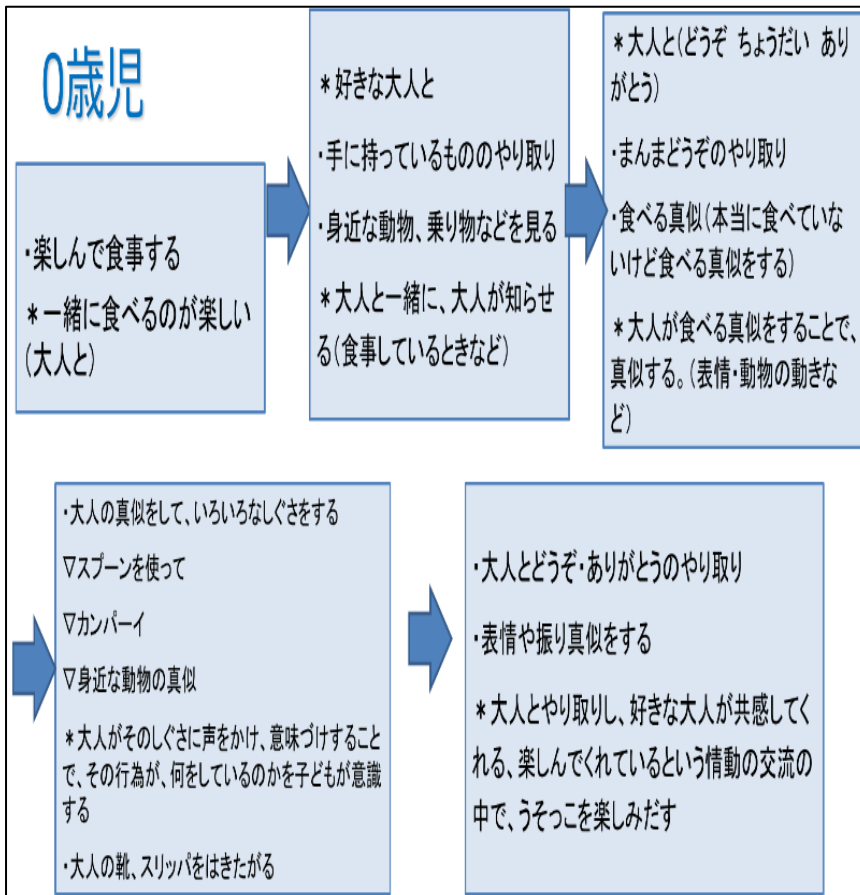


3つのあそびがそれぞれ楽しいということを知っていくことが大事です。みなさんもそうですが、子どもたちにも得意不得意があります。ただ、この3つのあそびの面白さを体験したうえで「得意・苦手」と思うのと、「苦手だからやらなくていいんだ」と、経験することなく他のあそびを「得意」とするのは違います。

「ごっこあそび」というのは、どこから始まるのでしょうか。あそびというのは、川の流れるようにずっとつながって、だんだんと分化していくものと考えています。ごっこあそびも、突然始まるわけではありません。クラス運営をしていくなかで、一番問題となってくるのは、楽しんでいること、イメージの違う子どもたちをどうつないでいくかということです。

## ごっこあそびの発展と仲間づくり

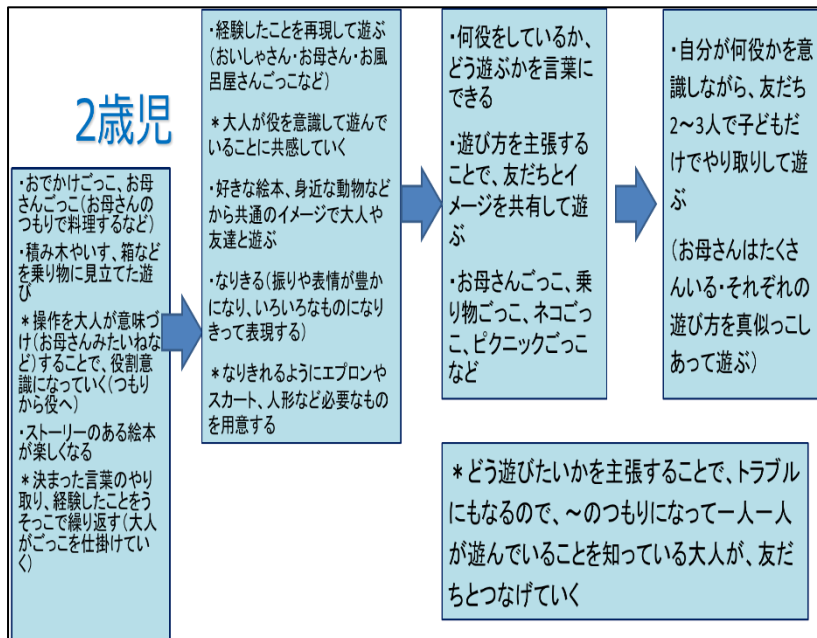
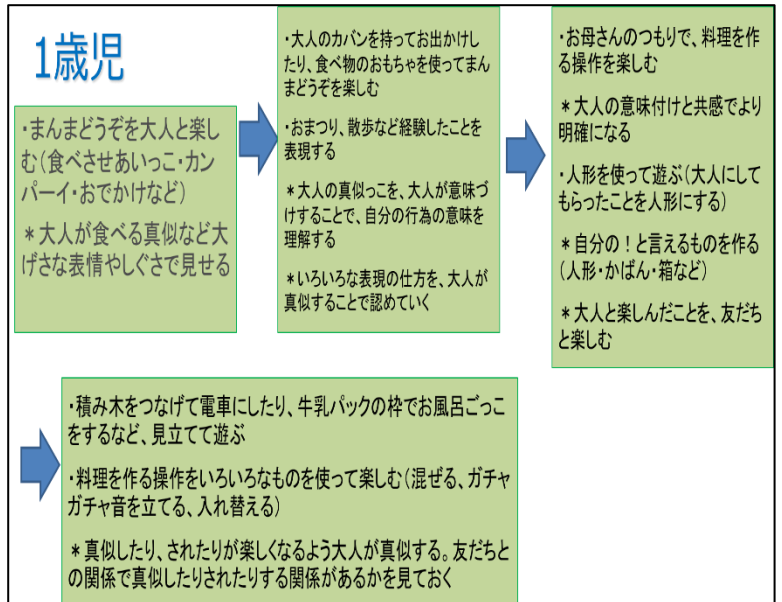
ごっこあそびってというのは、イメージの世界をつくったり広げたりしながら、子どもたちの関係性をつくっていくもの。ごっこあそびをつながっているもの、発展していくものとして考え、かかわります。



ごっこ遊びの最初は、まず「おとなに食べさせてもらう」「一緒に食事をする」などの体験があって、本物の食べ物で「まんまどうぞ」などとやりとりをします。それからおとなが食べるまねをしてあそぶと、子どももまねをするようになります。本当に口に入れずにあそべるのが「つもり」であそべるということです。それをおとなが「食べてるの。おいしいね」と声をかけて意味づけします。おとなが応答してくれるから「おもしろい」と思えるのが0歳児のごっこ遊びです。

1歳になると、これまで楽しんできたあそびがもう少し幅広くなって、おとなのまねっこみたいなあそびがかなり出てくるようになります。おとなが意味づけることで、「いまお母さんになっているんだ」「ワンワンみたいなんだ」と、自分がしていることを理解し、意識して、楽しめるようになります。

1歳の後半になると、おとなと楽しんでることを、子どもどうして楽しむようになっていきます。



2歳児になると、操作をおとなが意味づけることで、役割意識になっていきます。1歳で何となくお母さんのつもりで人形を抱っこしてトントンしていたのが、「私はお母さんなんだ」という役割意識になっていきます。だから、あそびが展開していきます。赤ちゃんを寝かしたりご飯をつくったり、時間の経過のようなものが出てくるのが2歳児です。

## 楽しみ・イメージの世界が違う子たちをどのようにつなぐのか

クラスの中で、うまく遊べない、うまくかかわれない子たちのなかには、楽しみ方、イメージが違うからそのようになってしまふ、ということがあるのかもしれませんが。Rちゃんという子がいました。あそびのイメージが違うので、友だちとうまくコミュニケーションが取れなかった子です。ごっこ遊びの発展で見ていくと、こんなに違ったんだ、ということに気づいていきました。

Rちゃんのクラスは2歳児でした。部屋にキッチンを用意して、そこにエプロンを置いたり、食べ物をつくれるようなグッズをたくさん置いたりして、2歳児のごっこ遊びを始めました。Rちゃんは、テーブルにある食べ物を全部落とす、ボールを三角コーナーに投げ入れる、友だちが使っているフライパンを取りあげる。トラブルになると0歳児の部屋に行き行って帰ってこない。だんだんRちゃんが0歳児の部屋にいて、自分のクラスにいな

ということが普通になっていきました。だれもRちゃんがないことに気づかないし、私たちも「また行った」と思うのですが、なかなか呼びにも行けずに過ごしていました。

このままではいけないと思い、0歳児の部屋に行って、Rちゃんが何を楽しんでいるか観察をしました。一緒にあそびながら、Rちゃんが何を楽しんでいたのかが見えてきました。0歳児の部屋にある食べ物の絵本を見て食べるまねをしたり、リングをカップに入れて振って、ガチャガチャと音を楽しんだりということ（1歳児の内容）をやっていました。「こんなに違ったんだ」と分かりました。2歳児の部屋に用意していたおもちゃは、Rちゃんにとっては何の面白みもなく、友だちのしているあそびが何となく楽しそうとは思うものの、どうやって遊んだらいいか分からず、壊すだけというかわりになっていたということに気がついて、そこから考えていくことにしました。これだけ違うと「どちらに合わせる？」という考えも出てきます。まずRちゃんが楽しんでいることを保育者が共感して、それを周りとも共有できる関係づくりを始めようと、「ネコちゃんごっこ」に取り組みました。

Rちゃんは、一緒にあそべる友だちがないので、鏡に映る自分と楽しめます。鏡の前で、プリンのおもちゃを本当においしそうに舐めます。でも、まわりの子は最初「プリン舐めてきたない」といった見方でした。でも、ネコごっこのなかで、プリンを食べるまねと一緒に楽しめるようになると、「Rちゃん、おいしそう」と、見方が変わってきます。ネコになってあそぶ楽しさを共感することで、かかわる友だちができてきて、友だちの楽しそうな遊びをRちゃんもまねして楽しむ、というふうになんげつ変わってきました。

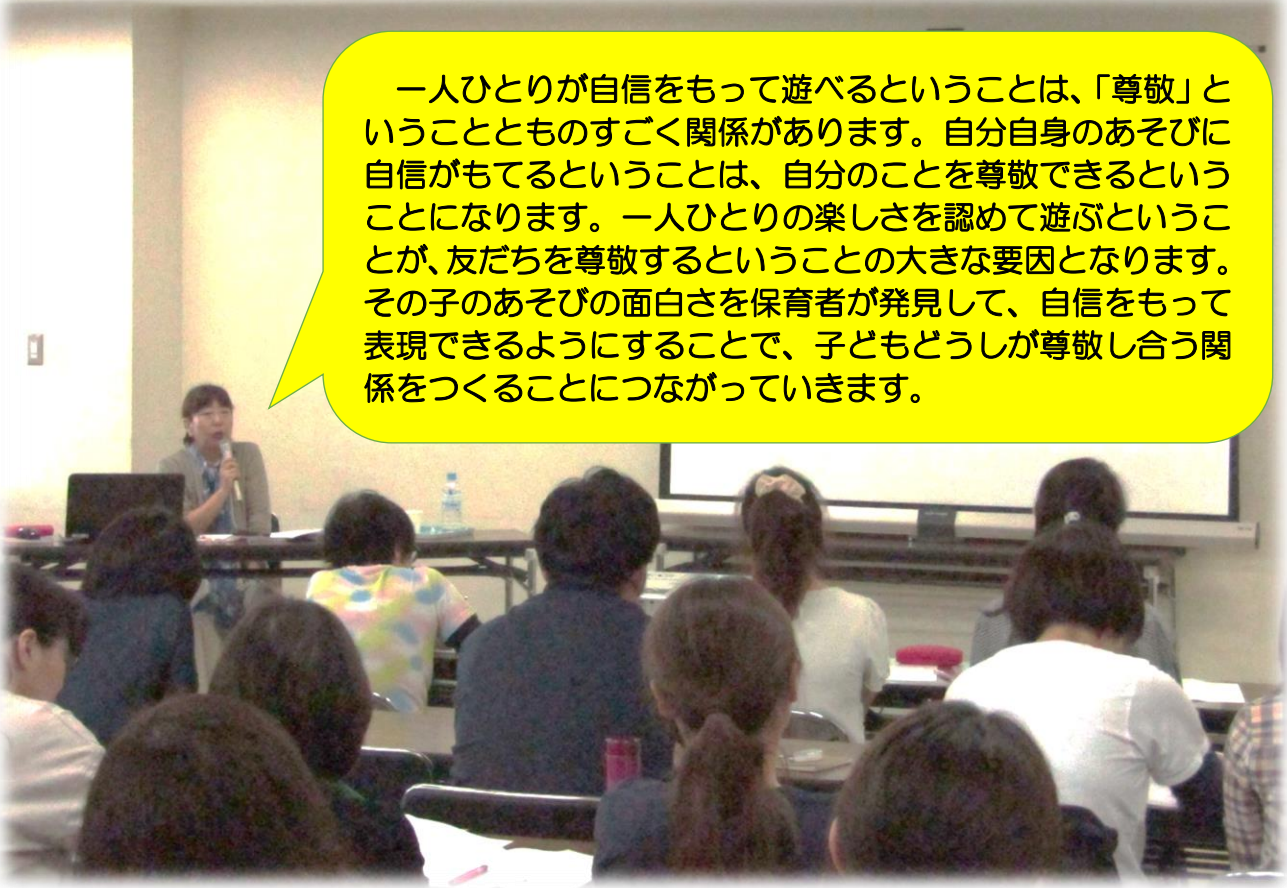
友だちとたくさん遊べるようになってきたので、生活再現あそびなど、いろいろとあそびを展開していきました。いろいろ工夫しながらたこ焼き屋さんごっこをするようになって、「よかった」と思っていたのですが、Rちゃんは「お客さんになる」と言い、お店をしなくなりました。あそびをどんどん展開できる子は、シャッターをあけるなどお店を準備するところから始めます。ところがRちゃんとはにかくたこ焼きを焼こうとします。「まだ準備中だからダメ」「お客さんが来てないのに冷めるでしょ」などと怒られるので、Rちゃんは楽しくなくなり、お客さんになろうとしたのでした。保育者の「こうしたら楽しいのではないか」という思いが主導になってしまっ、子どもが本当に楽しんでいることに寄り添ったあそびになっていなかったと反省し、もう一度Rちゃんが何を楽しんでいるのかを見つめました。

あるとき、Rちゃんが人形を抱っこして、無言で揺れていました。そこで、「どうしたの？赤ちゃん、ねてるの？」と話しかけ、「寝かしてるの？」「熱があるなら、病院に連れていかないといけないね」などのやり取りを続けました。すると、「一緒に病院にいこう」と、つながってくる子が出てきました。周りの子が、Rちゃんが何をしてあそんでいるのかわかったからです。保育者がRちゃんのことを意味づけすることで、Rちゃんも

また自分のしているあそびが何なのかをはっきり意識できます。

最終的には、自分の役割を意識して友だちと遊べるようになっていきました。





一人ひとりが自信をもって遊べるということは、「尊敬」ということともものすごく関係があります。自分自身のあそびに自信がもてるということは、自分のことを尊敬できるということになります。一人ひとりの楽しさを認めて遊ぶということが、友だちを尊敬するということの大きな要因となります。その子のあそびの面白さを保育者が発見して、自信をもって表現できるようにすることで、子どもどうしが尊敬し合う関係をつくることにつながっていきます。

## 参加者のアンケートから～



☆「子どもたちの人権を保障する」と聞くとどうしたらよいのかわからないことも多いのですが、あそびをとおして自分や周りの人を尊重する体験をつみ、そうすることが一人ひとりの人権を保障することになると教えていただきました。

☆0歳児でも友だちとのかかわりをもっている、保育士のかかわりでつなげていけるということを学びました。一人ひとりの子どもの姿をしっかり捉え、本当の意味で何を楽しんでいるのか、観察し理解していきたいと思います。

☆あそびのイメージが違ったり、共有できていなかったりしている子たちをクラスの中でよく観察してあそびを発展させていったり、時には一つのあそびの段階をもどしてじっくりあそびこんでいくことをしていきたいと思いました。